

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

「生きる」につながる「水」

沖縄県 多良間村立多良間中学校 三年 山川 梨緒

どうやって人は生きていくのだろうか。自分の住んでいる多良間島の「水」について調べていくうちに、私はそんなことを考えるようになりました。島の人達が「水」を大切にしてきた生活の歴史は、「島で生きる」ことの尊さを私に教えているような気がします。

多良間島は、沖縄本島からさらに南にある宮古島と石垣島のほぼ中間に位置し、海の上にぽっかり浮かんでいるように見える小さな島です。

現在、島の生活に使われている水は、すべて地下水からなる簡易水道になっています。昔は「井戸」から汲み上げた水で生活していました。今も、通学路などを歩いていると、道のそばにコンクリートでふさがれている井戸があらこちらで目に入ります。その井戸がいつ頃まで使われていたのかなど、私は今まで考えたこともありませんでした。しかし、その場所こそ、島の人達が生きるために必要とした「井戸」だったのです。

友達と一緒に多良間島の井戸について調べました。驚いたことに、自然井戸と人工井戸の二種類が存在していました。自然井戸は、人工的に掘ったものではなく、自然にできた湧き水のある洞窟のことです。自然の井戸の洞窟の中に入ると、牛や馬に水を飲ませるウマヌカーという泉や、男女別の水浴びする泉、飲料水の泉がありました。奥に入るとひんやりしていて、触れてみると冷たい湧き水でした。また、塩分の多い水といわれている自然井戸では、なめてみると本当にしょっぱい味がしました。

多良間島の井戸には、多くの伝説が残されていて、井戸と人々の生活が深いつながりを持つていたことが伝えられています。生活の変化と共に、さらに多くの水が必要になってきたので、島の人達は協力して人工の井戸を掘って使う暮らしへと変わっていきます。私の祖母は、「昔は遠くても水を汲みに一日に何回も井戸まで行き、運んできたんだよ」「大変

だった」と話してくれます。今の私達の生活からは想像もつかないくらいに水を得るために苦労してきた頃の話です。その後、水道による給水が昭和四十六年に開始されました。その後も安心して安全な水道水を供給するため水道事業に多くの人が関わり、奮闘してきました。井戸の歴史を学ぶことで、「水」によって島の人達の生活が改善されてきたことが分かります。

多良間島は、「八月踊り」や「スツウプナカ」の行事が有名です。どちらも五穀豊穡の喜びと感謝を伝えるための行事です。「スツウプナカ」は、その年に畑で豊かに作物がとれたことに感謝し来年もまた、豊作になるようにと祈りを込めて行う行事です。「スツウプナカ」の際には、まず自然井戸に供物を捧げてから行事が始まります。井戸から祭りが始まるのも、井戸、そして水の恩恵に人々が感謝しているからだと思います。私達の祖先は、日常の暮らしの中で、水の大切さを知っていたから井戸へ感謝する行事が今でも引き継がれてきているのです。

今、毎日、何気なく使っている水ですが、多くの人々の苦労によって、このような生活が守られてきたのだと分かりました。「水」は、限りある資源であることにも改めて気づかされました。私達は「水」がないと生きていけない、だから、「水」がある生活を大切に、節水を心がけていくことも必要なことです。洗面、歯磨きでは、流しっぱなしにしないことや、シャワーの水はこまめに止めるなど、できることを続けていきたいと思います。

山も川もない、小さな島には、みんなで助け合いながら「水」を大切にしてきた心が受け継がれています。島を受け継ぐ私達も「水」の大切さが、「生きる」につながっていると感じる心を未来へ残していきたいと思えます。